

令和2年度 第1回 忠別川における河道の質的整備に向けた検討ワーキンググループ 議事要旨

■日時：令和2年10月7日（水）13:00～16:30

■場所：旭川開発建設部旭川合同庁舎、忠別川（現地視察）

■出席者：

所属等	氏名
北海道大学大学院工学研究院 准教授	岩崎 理樹
北海道大学大学院工学研究院 教授	清水 康行
国土交通省 国土技術政策総合研究所 河川研究部 河川研究室 室長	福島 雅紀

※五十音順、敬称略

■議題

□忠別川の課題について

- ・ 忠別川の概要
- ・ 忠別川の現状と課題
- ・ ワーキンググループの進め方

□現地視察

■ワーキンググループの様子



【議事要旨】

■ 忠別川の概要、現状と課題について

- KP10.0 下流では堤々間が狭く、上流では堤々間が広がっていることに注目することも重要である。
- 本 WG は低水路内の検討であるが、高水敷樹木についても今後は検討が必要である。
- 砂利採取直後の砂州波高の変化は捉え難いため、砂利採取の影響のない、例えば平成元年～平成18年程度の範囲の変遷を追加すると良い。
- 砂州波高の変遷は、一定の区間ごとに変遷傾向が異なる可能性があるため、区間を区切って整理すると良い。
- 砂州波高が増加している原因について、砂州上への土砂の堆積が進んだからなのか、滲筋の河床低下が進行したからなのかを精査すると良い。

■ ワーキンググループの進め方について（氾濫危険度分析、対策必要箇所）

- 整理された資料から河岸侵食のメカニズムを確認し、出水時に実際に生じている事象なのか整理すると良い。
- 他の河川にて明確な閾値が判明している二極化指標について、忠別川で検討することは価値があること。また、忠別川の H28 出水、H30 出水でサンプルが少ない場合は、過去の出水において把握することも有効である。
- 堤々間について、KP2.0～4.0 付近の市街地近接区間（下流部）で特に流下能力が低いのは、治水上、課題ではないか。また、河岸侵食を含め対策の優先順位をどのように考えていくかが重要である。

■ ワーキンググループの進め方について（対策案の検討、モニタリング計画）

- 副流路設置による主流路の負担軽減の対策案は、副流路の掃流力確保が重要となる。（副流路の維持が難しいことに加え、河川利用の面から河川利用者の不評となる可能性がある）
- 根継ぎ護岸の対策について、河岸侵食のリスクがどのように変化するのか検証が必要である。
- 河道状況について過去の状態に戻すことは難しいため、現状の河道状況で実現可能な管理方法を考えることが重要である。
- 河道整正で覆土する際には、砂州を掘削した土砂を深掘れ箇所に充填しただけでは流出してしまう事例が多い。覆土する材料の粒度分布に留意する必要がある。
- 河道横断面形や樹木の繁茂状況を考慮し、適正な流路幅を設定する必要がある。
- 河道整正区間の効果によって、その上流区間の攪乱頻度が増加し樹木の繁茂を抑制できる可能性がある。
- 二極化指標については毎年測量できるわけではないので、河床地形を毎年計測可能な方法を検討したほうが良い。
- 二極化のモニタリングについて、グリーンレーザー搭載のドローン等で地形変化を計測することも考えると良い。